



# これは川ではない 滝だ！

「これは川ではない滝だ！」  
お雇い外国人のヨハニス・デ・レイケは、富山県の常願寺川を視察したおり、故郷オランダの河川とは比較にならない急流を目の当たりにして、このように叫んだといわれています。



安政の大転石 安政5年(1858)の土石流によって、このような大石が常願寺川を流れ落ち、周辺に甚大な被害を与えた(富山県立山町) 2010年撮影

急峻な山岳に端を発し、狭い平野を一気に海へと流れ下る日本の河川と、欧米の緩やかなそれとの違いを、この言葉は鮮やかにしていることから、河川関係者の間で語り継がれてきました。

しかし、実はデ・レイケがこの言葉を残したという証拠はなく、研究者の間では疑問が持たれていました。令和2年(2020)、貴堂巖氏の研究によって、永く不明とされていた事実が明らかとなりました。で、ご紹介したいと思います。

まずその前に、お雇い外国人とデ・レイケについて、簡単に触れてみましょう。

## お雇い外国人

お雇い外国人とは、幕末から明治にかけて欧米の技術や学問を吸収するために、幕府や明治政府が雇った外国人たちのことです。土木・建築

分野で有名な人物をあげますと、まずは明治政府招聘第一号のリチャード・ブランドン。彼は日本各地に灯台を建設し、外国人に「ダーク・シー(Dark Sea)」と恐れられた日本近海を明るく照らし出しました(P18-19に関連記事掲載)。

鉄道技術者のエドモンド・モレルは29歳で来日し、日本初の新橋・横浜間鉄道建設に尽力しますが、開業を見ることなく30歳の若さで病没しました。その妻も後を追うように、モレルの死からわずか12時間後に亡くなり、2人は横浜の外人墓地に今も眠っています。

建築では、なんとといってもジョシア・コンドルをあげなければなりません。イギリスの建築家であった彼は、来日すると鹿鳴館やニコライ堂など著名な建築物を設計し、辰野金吾や曾禰達蔵、片山東熊など日本の建築家第一期生ともいえるべき人物

たちを育てました。

## ヨハニス・デ・レイケ

そのようなお雇い外国人の1人であったヨハニス・デ・レイケは、オランダの土木技術者集団の一員として明治6年(1873)に来日しました。彼を日本に招いたのは、一足先に来日していた長工師<sup>※1</sup>ファン・ドールンでした。ドールンは明治政府に対し、技師と技手<sup>※2</sup>それぞれ3人ずつの追加を要請し、最初にデ・レイケを推薦したようです。しかし、これは異例の抜擢<sup>はつてき</sup>でした。なぜなら学歴社会のオランダにあって、デ・レイケは先祖代々の臨海工事請負業者の家に生まれ、小学校しか出ていなかったからです。ドールンは、学歴に頓着することはなく、現場でたたき上げたデ・レイケを、卓越した技術者だと見抜いていたのでしょう。来日後の活躍は目覚ましく、大阪

港、三国港、広島港、福岡港、長崎港、筑後川、吉野川、多摩川、淀川など数々の土木工事を手がけます。薩摩義士の悲劇で有名な木曾三川の分離工事も、彼の立てた計画をベースとして初めて実現し、それ以降の洪水による被害は激減しました。もちろん常願寺川の河川改修も事跡の1つに含まれています。

デ・レイケはお雇い外国人としては異例の30年の長きにわたって日本に滞在し、多くの事業を成し遂げました。まさに日本近代土木事業の恩人というべき人物だったのです。

## 上林好之説

さて、それでは本題に戻りましょう。例の言葉がデ・レイケのものかどうか、研究者間でもさまざまな説が唱えられました。例えばデ・レイケの研究者である上林好之氏は、「科学的にもごときを観察するデ・レイケがほんとうに、そのような発言をしたのだろうか」と疑問を呈したうえで、自身が発見した史料を検討し、次のように考察しています。

「常願寺川の災害が大きくなる原因を、デ・レイケは『滝がないから位置のエネルギー損失が少なく、そのうえ河床勾配も急なので河川の流速が大きくなることにあるのだ』と科学的に説明した。これに対して、富山県の職員は『滝のような急流に原因があるのだ』と情緒的に表現し

ている。『これは川ではない滝である』といったのは、デ・レイケではなく富山県の職員だった。しかし、権威のあるデ・レイケが『滝』の話をしたことから、いつしかデ・レイケがそういつたというエピソードにかわっていったのだろう」

## 松浦茂樹説

土木史研究者の松浦茂樹氏は、昭和37年(1962)に建設省富山工事事務所が刊行した『常願寺川沿革史』の記述が発点になったのではないかと推測しています。それは次のようなものでした。

「又デ・レイケの逸話としての古老の言であるが、彼はよく現場を踏査観察実測し『これは河ではなくて滝である』と叫ばしめた程で彼が改修の根本理念はこの言葉につきていたものである」

松浦氏は、この記述の根拠を編集者に尋ねたところ、「県立図書館が富山市立図書館かの何かの資料で読んだ記憶がある」と述べたといっています。

## 発見された2つの記録

この永年の疑問が氷解した発端は、富山県立山カルデラ砂防博物館の是松慧美学芸員が明治時代の県議会議事録から発見した2つの記述でした。最初の記録は、「第七回富山県通

12月)に記載の「早月川ハ百貫目二百貫目の大石ヲ流出スル急流ナルハ各員モ明知アルナラン。先年、土木権頭巡回ノ節、随行ノ外人ハ該川ヲ川ニ非ズシテ瀧ナリト云ヘリ」で、次いで「第十三回富山県臨時会議録」(明治23年(1890)5月)に「早月川ノ如キハ、或人之ヲ称シテ川ト云フヨリハ寧ロ瀧ト云フ方当レリト云ワレシヤニ聞クガ、成程下流ニ在テ上流ヲ望メバ全ク瀧ノ如ク有様ナリ」。

このように最初の記録には、「随行ノ外人」が言ったと、はっきりと書かれており、しかも常願寺川を指したのではなく、同じ富山県下を流れる早月川だったことが明らかになりました。早月川は平均勾配8.3%という日本屈指の急流です。そして、この記録から、その言葉がデ・レイケのものだった可能性は、ほぼ確実になくなりました。なぜなら、その当時、デ・レイケは富山県にまだ来県していなかったからです。

## ローウェンホルスト・ムルデル

それでは、「随行ノ外人」とは一体だれなのか。是松学芸員の発見から研究を進めた貫堂氏によれば、最初の記録(明治21年12月)以前に来県し、土木権頭に随行したような外国人技術者は、デ・レイケと同じオランダ人だったローウェンホルスト・ムルデルただ1人だとわかりま



ローウェンホルスト・ムルデル

## おわりに

こうして、「これは川ではない滝だ！」は常願寺川ではなく早月川をさし、デ・レイケではなくムルデルの言葉だったと、わかったのです。貫堂氏は、ムルデルの業績は調査・計画で影が薄かったのに対し、常願寺川改修工事をやり遂げたデ・レイケの存在感は、あまりに大きく、発言が独り歩きする中で、誤って伝わっていったのだろう、と推測しています。

(文：江口知秀)

※1 長工師:技師長のこと

※2 技手:技師の下に属する技術者のこと

来日当初、明治6年(1873)頃のヨハニス・デ・レイケ 【デ・レイケとその業績】(建設省中部地方建設局木曾川下流工事事務所 編・行 1987年)より転載